

私はつねに考えているのか？

——意識と経験を巡るデカルトとロックの対立——

松本長彦

はじめに

ヨーロッパ哲学史の時代区分は、伝統的に「古代哲学」「中世哲学」「近世哲学」「現代哲学」という、比較的大雑把な時系列順の区分が行われてきた。そして、「近世哲学」をどこから始めるかについては、いくつかの立場がありうるであろう。しかし筆者は、近世哲学史の記述上は先頭に置かれることはまずない、デカルトの哲学を、あえてその冒頭に置くべきであると考えている。もしデカルトを先頭に置けば、年代から見た場合に一般に近世哲学に入れている、フランシス・ベーコンや、さらに遡ってニコラウス・クザーヌス等々が、近世哲学から漏れてしまうのではないか、という批判があるかもしれない。そのような批判をかわすために、用語上の区別をして、デカルトから始まるのを「近代哲学」と呼んでもよいと考えている。もっとも、「近世」も「近代」もヨーロッパ語（例えば英語）に翻訳すれば同じ modern という語を用いることになるので、ほとんど無意味と思われるかもしれないが、このような用語上の区分は、日本史に於いては用いられているのであるから、日本語としては許容されうるのではあるまいか。

それよりも重要なのは、何故「近代哲学」がデカルトから始まったと考えねばならないかである。近代哲学がデカルトから始まったという場合、彼の有名な命題「我思う、故に我在り。」(cogito, ergo sum) ⁽¹⁾がその出発点となることは、改めて指摘するまでもないことであろう。とりわけ筆者のように、デカルト以降のヨーロッパ近代の哲学は、多様な主張を展開しながらも、その底流として一つの共通した思想動向をもつ、と考える者にとっては、この命題がもつ意義は決定的である。その共通した思想動向とは、我々人間存在を「意識存在」と捉え、そして意識存在のもつ明証的確實性から出発して、意識の対象である他の一切の存在者の存在性格を確保しようとするものに他ならない。言い換えれば、意識の明証性を出発点として、意識の側から対象の本質を規定し、そのようにして意識と対象との関係(即ち真理認識)を取り結ぼうとする態度、これが近代哲学の底流をなす基本的動向と考えることができるのである。その意味では、意識と存在との必然的連関と、両者の関係に於ける意識の原理的優位こそが、近代哲学を根本的に性格づけているのである。そして、このような意識の原理的優位を宣言するのが、「我思う、故に我在り。」命題である以上、デカルトのこの命題によって、近代哲学は実質的に開始されたと考えるべきなのである。

しかし、このように近代哲学の最も基礎的的原理的な位置を占める「考える私」(ego cogitans)は、単純にデカルトが考えた通りにその存在性格を保証されるわけではない。近代哲学の展開の中で、その存在性格を巡って、様々な議論が展開されていく。いやむしろ、この「考える私」の存在性格をどのように考えるかという点に、各哲学者の哲学の特徴が現れると言っても過言ではないのである。

本稿では、この「考える私」に於ける「思惟(考えること)」の「現実性」(actuality)の問題を巡るデカルトとロックの対立を取り上げることによって、近代哲学の二大潮流と言える所謂理性論的思考と経験論的思考の特徴を浮き彫りにしていきたいと思う。

一 「思惟」の存在論的現実性——デカルトの場合——

周知の如く、デカルトに於いて「我思う、故に我在り。」は、所謂「方法的懐疑」(doute méthodique)の果てに、もはやこれ以上疑いえない唯一のものとして見出される。『省察』の叙述に従えば、まず、懐疑の果てに見出されるのは「我あり、我存在す」(Ego sum, ego existo.) (2. Med., p. 25.) という事実、即ち端的な「私の存在」(mea existentia = sum sive existo) である。しかし、この「私の存在」がいかなる「誇張された懐疑」(le doute hyperbolique)をも排除して確実な事実として私に捉えられうるのは、「私が思惟する間」(quandiu cogito) (2. Med., p. 27.) だけである。私の存在 (sum) と私の思惟 (cogito) とは切り離しえない。従って、私は「思惟する【考える】もの」(res cogitans) としてのみ存在しうる。この事態を簡潔に表現するのが「我思う、故に我あり。」(Ego cogito, ergo sum.) (2. Resp., p. 140; DM., p. 558.) という命題である。そして、この cogito, ergo sum. は一切の懐疑を免れているが故に、我々がそれに拠るべき「哲学の第一原理」(le premier principe de la Philosophie) となるのである (DM., p. 32.)。

さて、このようにして見出された cogito, ergo sum. に於ける「考える私」を、デカルトは次のようにも表現している。

「しかし、それでは私とは何であるのか。考えるもの (res cogitans) である。では、考えるものとは何であるか。すなわち、疑い、理解し、肯定し、否定し、意志し、意志しない、なおまた、想像し、感覚するものである。」

私はつねに考えているのか？

(2. Med., p. 28.)

このように、デカルトに於ける「思惟」(cogitatio)とは、狭義の知的作用ではなく、むしろ我々の意識作用一般を指している。このような意識作用を行うものとして、「考える私」は存在している。それ故、デカルトに於ける「考える私」は、「意識存在」と性格づけることができるのである。

さて、このような「意識存在」としての私は、その働きである「思惟」に於いて、同時に、明晰判明 (clare et distincte) に自〇自身を知る私の働きとして、「自〇意識」(conscientia sui ipsius) であると見なすことが出来る。何故ならば、Ego cogito, ergo sum. に於いて、私 (Ego) は、私があるところから (mea existentia = sum) をあ、私は何であるかということ (mea essentia = cogito) をあ、明晰判明に知っているものであるから。より厳密に言えば、「考えるもの」(意識存在)である私は、自らが「考えるもの」であることを「精神の単純な直観」(simpliciter intuitus) (2. Resp., p. 140.) によって認知するのであるから、自〇直観を含む自〇認識 (cognitio sui ipsius) とあるが、自〇認識は明らかに自〇意識を含んでゐるはずなのである。⁽²⁾

そしてデカルトは、このような自〇意識としての「考える私」の働きである「思惟」(cogitatio)が、「つねに現実的」(semper actu) でなければならぬと主張する。

「我々は、我々の精神の働き或いは作用をつねに現実的に意識してゐる。」(4. Resp., p. 246.)

しかし、この「考える私」の働きとしての思惟が、「つねに現実的」でなければならぬ、という点に関しては、

『省察』出版当時から異論が提出され、デカルト自身がそれに再反論を加えている。『省察』「第五反論」に於いてガッサンディが、

「しかし私はここで、あなたが『思惟はあなたから引き離されえない』と言われる時、あなたが存在している限りあなたは絶えず思惟していると知解しておられるのかどうかという点について困惑させられます。：（中略）：しかしあなたが昏睡状態にある間、あるいはまた母胎のうちにあつてさえ、どのような仕方でも思惟することができると理解しえない者たちにとっては、上述のことは納得しがたいことでしょう。」(5. Obj., p. 264.)

という反論を述べたのに対して、デカルトは「第五答弁」に於いて、

「しかしながら、魂は思惟する実体なので、なぜに、それがつねに思惟することがなかったりなどするでしょうか (Sed quidni semper cogitare, cum sit substantia cogitans?)。われわれが、成人になっており、健康であり、目覚めているという際に、われわれのもったことを知っている思惟ですら、大多数を想起起こすことすらないので、魂が母胎のうちで、あるいは昏睡状態等々のなかでもった思惟を、われわれが想起起こさないということは、何か不思議なことでしょうか。というのは、精神が、身体にそれが結合されているかぎりにおいて、もったところの思惟の想起のためには、それらの或る種の痕跡が脳に刻印されていることが要求されるからであつて、かかる痕跡に自らを振り向けることによって、言うなら注意を傾けることによって、精神はそれらを想起する〔に至る〕のです、が、幼児のあるいは昏睡している者の脳がそうした痕跡を受容するのに適して

私はつねに考えているのか？

いないとするとしても、何かしかし不思議なことがあるでしょうか。」(5. Resp., pp. 356f.)

と答えている。さらに「第六答弁」に於いては、

「なるほど、「あらかじめ」『思惟とは何であるか、また、存在とは何であるかということを知っているのではなければ、何びとも、自分が思惟していることも、また、自分が存在していることも確知しえない、』ということは真実です。が、だからといって、このためには反省された、あるいは論証によって獲得された知識が要求される、というわけではありませんし、ましてや自分が知るところを知ること、さらには、自分が知るところを知ることが知るところを知ること、かくして無限に至るところの、反省された知識についての知識が要求されることはなく、そもそも、そのような知識は、いかなる事物についてもつけられません。そうではなくて、そのことを、反省された知識につねに先行するところの、あの内的な認識によって知れば、それでは足りるのであって、この内的な認識たるや、思惟についても存在についても、すべての人間に本有的であり、もしかして先入見によって覆われてしまっていて、言葉の意味によりは言葉〔の音〕にいっそう多く注意を払うときには、自分たちはそれをもっていないと仮想するということが、われわれにはありうるにしても、しかし実際にあっていないということはありえない、というほどのものなのです。それですから、誰かが、自分が思惟していることに気づき、かくしてそこから、自分が存在するということが帰結されることに気づくという場合には、もしかすると以前にその人が、思惟とは何であるか、また、存在とは何であるかを、かつて全く探求したことがなかったにしても、その人はしかし、この両者を、その点において自ら満足するに足るほど十分に識らない、と

「いうことはありえないのです。」(6. Resp., p. 422.)

とも述べている。

即ち、デカルトの思惟の現実性 (actualitas) についての主張は、彼の哲学が拠って立つ「第一原理」である、*cogito, ergo sum* がもつ存在論的な構造から必然的に要求されることなのである。何故ならば、「思惟」(*cogitatio*) が「考えるもの」(*res cogitans*) である精神の「主要属性」(*praecipuum attributum*) である以上、思惟は、精神としての私の存在 (*existentia mea = sum*) と切り離すことはできない。そして、私が思惟するとき私は現実 (*actu*) に存在しているのであるから、私の思惟 (*cogito*) も *cogito, ergo sum* がもつ存在論的な構造上、必然的に現実的 (*actu*) でなければならぬのである。従って、デカルトに於いて「考える私」が存在する限り、思惟は、私の存在と「同時」に「つねに現実的」(4. Resp., p. 246.) にかつ「直接的」(2. Resp., p. 160.) に、私の存在を捉えるものとして、構造上成立していなければならないのである。

そして、現実の意識経験に於いて、そのような思惟がつねに現実的なものとして意識されるか、という問題に関しては、デカルトは大した困難を感じていないようである。「第五答弁」では「魂は思惟する実体なので、なぜに、それがつねに思惟することがなかったりなどするでしょうか」(5. Resp., p. 356.) と断言し、思惟していなかったのではないか、という疑問に対しては、記憶の曖昧さの問題としてこれを片づけている。「第六答弁」では「思惟についても存在についても、すべての人間に本有的である」ところの、「反省された知識につねに先行するところの、あも内的な認識」(*cognitio illa interna, quae reflexam semper antecedit*) (6. Resp., p. 422.) が語られているが、これは、既に述べた *cogito, ergo sum* に於いて、私 (*Ego*) は、私があるところにいる (*mea existentia = sum*) を

私がつねに考えているのか？

も、私が何であるかということ (mea essentia = cogito) をも、明晰判明に知っている (即ち自己意識をもっている) ということに他ならない。つまりここでデカルトは、cogitoの働きとしての思惟について、「自分たちはそれをもっていないと仮想するということが、われわれにはありうるにしても、しかし実際にもっていないということはありえない」という形で、それらがつねに構造上現実に働いていることを強調しているのである。

二 経験としての自己意識——ロッキの場合——

このようなデカルトの「魂はつねに思惟している。」という考えに対して、真っ向から異論を唱えたのが、イギリス経験論を代表する哲学者ジョン・ロックである。

ロックの哲学が、デカルトの哲学の影響を全面的に受け、その概念装置の多くを受け継いでいることは、彼の主著である『人間知性論』を一読すれば、容易に理解できることである。しかし、ロックがどうしてもデカルトに同意できない点がある。それは「経験」(experience)の取り扱い方である。まさにこの点が、所謂「大陸の理性論」[合理論] (the Continental Rationalism) と「イギリス経験論」 (the British Empiricism) とを分かつものである。とは、むしろ哲学史の常識であり、改めて強調するまでもないことであろう。そして、「意識存在」の現実性に関する問題に於いても、この点がデカルトとロックの思想を截然と分けるものとなっているのである。

ロックの哲学、特にその理論哲学が、「観念」(idea)の起源や、その及ぶ範囲等の考察を基礎にして構築されていることは、周知のところである。この「観念」をロックは、

「観念 (ideas)、思念 (notions)、或いはその他何と呼んでもよいが、或る人が自分の心の中にあると観念し、自分に意識するもの。」(EHU, 1, 1, 3)

「思考に際して心が携わることのできる一切を表現するために、この言葉を使う。」(EHU, 1, 1, 8)

「およそ人間が考えるとき、知性の対象であるものを表す。」(ibid.)

「心が自分自身の内に知覚するもの、即ち、知覚とか思惟とか知性とかの直接の対象であるもの、これを私は観念と呼ぶ。」(EHU, 2, 8, 8)

と定義している。これらの定義の中で、観念は「自らに対して意識される」(be conscious to oneself) ものとされる。つまり、「意識」(consciousness) は、観念についての意識である。

そしてロックは、このような意識が観念を獲得する唯一の手段は「経験」であるとし、その経験を二種類に分類する。即ち、感覚器官を通して外的対象の観念を知性に与える外的経験 (external experience) である「感覚」(sensation) (EHU, 2, 1, 3) と、「我々自身の心の作用」(operations of our own minds) の知覚 (∥内的経験 internal experience) である「反省」(reflection) (EHU, 2, 1, 4) である。この「反省」により「自己意識」(selfconsciousness) が生じる。

「すべての人間は、自らが思惟していることを自己意識して居る。」(Every man being conscious to himself, that he thinks,...) (EHU, 2, 1, 1.)

私はつねに考えているのか？

「この作用「心の作用」は、魂が反省し考察するようになる、外の事物から得ることのできなかった他の一組の観念を知性に供給する。それらの観念とは、知覚、思惟、疑い、信じること、推理すること、知ること、意志すること、我々自身の心の一切の様々な働きである。これらを我々は自分自身の内に意識し、観察する。」

(EHU., 2, 1, 4.)

ロックもデカルトと同様に、自らの「思惟」(＝意識活動)を意識する働き(＝自己意識)を指摘する。そして、この自己意識が、思惟の現実的活動につねに伴っていることを指摘する。

「目覚めている時であろうと眠っている時であろうと、人間はそれを感知する (being sensible of it) ことなしに思考することは、いかなる時にもできない。」(EHU., 2, 1, 10.)

「我々がそれを感知することは、どんな事物にとっても必要というわけではないが、我々の思惟 (thought) にとっては必要であり、そのことは、我々が思惟することを意識することなく思惟しうるのではない限り (ill we can think without being conscious of it) 我々の思惟にとって必要であり、またつねに必要なものであるであろう。」(loc. cit.)

「考えてこれを意識しない者があると想定することは難い。」(EHU., 2, 1, 11.)

ここで述べられていることには、二つのポイントがある。一つは、「思惟」(thinking) は、つねに意識されていなければならない、という点。今一つは、「意識される」(be conscious of) とは、「感知される」(be sensible of)

ことである、という点である。「感知される」とは、まさに内的に経験されるということである。従って、「思惟」という心の働きは、つねに反省によって内的に経験されていなければならない、とロックは主張しているのである。「意識とは、人間の自分自身の心の中で起こることの知覚である。」(EHU, 2.1.19) 即ち、ロックにとって、自己の心の働き(≡思惟)についての意識(≡自己意識)は、同時に自己経験でなければならないのである。ロックにとっては、思惟も経験されねばならない。経験されないような思惟は意味をもたない。まさに「経験論」の立場である。そして、

「目覚めている人の魂は、決して思惟せずにはいない。思惟することが目覚めていること conditions である。」(EHU, 2.1.11)

として、ロックは、目覚めている以上、思惟はつねに意識され、経験されていると考える。ここまでは、デカルトの意識論とそれほど差はないように思われるかもしれない。しかし、自己意識を自己経験として要求する経験論的立場に基づいて、ロックは痛烈なデカルト批判を展開するのである。

三 「魂はつねに思惟するとは限らない。」——ロックのデカルト批判——

ロックは、魂はつねに現実的に思惟している、というデカルトの説に対して(デカルトを名指ししているわけではないが)、次のように述べている。

私はつねに考えているのか？

「私自身は、白状すると、いつも観念を観想すると自らに知覚しない鈍い魂の一つ (one of those dull souls) をもっている。また、物体はいつも運動する必要があると想念できないように、魂はいつも思惟する必要があるとは想念できない。というのは、観念の知覚と魂との間柄は(私の想うところでは)、運動と物体の間柄と同じで、その本質ではなくて、その作用の一つだからである。だから、どれほど思惟は魂の固有な活動であると想定しても、魂はつねに思惟し、つねに活動すると想定するには及ばないのである。」(EHL, 2, 1, 10.)

ロックの批判の要点は、「思惟」(thinking) 即ち「観念の知覚」(perception of ideas) は、魂の「本質」(essence) ではなく「作用」(operation) である、という点にある。

確かに、既に見たように、デカルトの意識論に於いては、思惟 (cogitatio) は、考えるもの (res cogitans) である魂＝精神的実体の「本質」であるが故に、魂から切り離すことはできず、私の存在と「同時」に「つねに現実的」にかつ「直接的」に、私の存在を捉えるものとして、構造上成立していなければならない、と考えられていた。従って、上述の引用箇所が、たとえデカルトを名指ししていないとしても、デカルトを批判するために述べられていることは、明らかである。

ロックの批判を、もう少し詳しく見てみることにしよう。

既に述べたように、ロックは、我々が思惟する場合、我々はその思惟を経験のレベルで意識していなければならぬと考える。しかし、我々は眠っている間は、自分が思惟していることを意識しない(＝経験しない)。にもかかわらず、もし(デカルトのように)眠っている間も魂は思惟すると主張するならば、「人格の同一性」(personal

identity) をここに置くべきか分からなくなる、とロックは批判する。ロックに従えば、「人格の同一性」を保証するものは、「同じ意識」(the same consciousness) 即ち「意識の同一性」(identity of consciousness) である。

「意識がつねに思惟に伴い、この意識が全ての人を、その人が自己 (self) と呼ぶものにし、これによってその人自身を他の全ての思惟するものから区別するから、この意識にのみ人格の同一性即ち理知的存在者の同一性 (the sameness of a rational being) は存する。」(EHU, 2, 27, 9.)

「或る人間をその人自身にとってその人自身とさせるものは、同じ意識 (the same consciousness) であるから、人格の同一性は、この意識にだけ基づいており、この意識が一つの個体的実体だけに結びつけられるか、いくつかの実体の継起の内で連続しうるかは、どうでもよいのである。」(EHU, 2, 27, 10.)

「同じ実体であれ違う実体であれ、同じ意識が保たれているから、人格の同一性は保たれる。」(EHU, 2, 27, 13.)

「人格の同一性はどこに存するか、… (中略) …実体の同一性ではなく、意識の同一性 (identity of consciousness) にある。」(EHU, 2, 27, 19.)

しかるに、或る人間 A は、目覚めている間は自分の思惟を意識している。しかし、同じ A が、眠っている間は自分の思惟を意識しない。にもかかわらず、魂はつねに思惟するとすれば、別の人間 B が、A が眠っている間、思惟している、ということと同じではないか。そうだとすれば、そこには一つの「同じ意識」は存在せず、二つの別の意識が存在することになる。それ故、同じ魂に A と B という別の人格をもった二人の人間が存在することになる、とロック

私がつねに考えているのか？

は言うのである (cf. EHU, 2, 1, 11.)。

この、睡眠中の魂の思惟を我々が意識しないという問題に関しては、既に第一章で述べたように、デカルトは、記憶とそれを可能にする脳に刻印された痕跡とに關係させて、反論を切り抜けようとしたが (cf. 5. Resp., pp. 356f.)、ロックは、もしそうだとしたら、これほど無駄な活動はないであろうと批判する。

「もし魂が自分自身の思考を記憶しないなら、自分のために思考を貯蔵できず、必要に応じて想い出せないなら、過去のことを顧みて、以前の経験・推理・観想を利用できないなら、何のために魂は思惟するのか。」(EHU, 2, 1, 15)

「もし私が、自分が思惟していることを知ることなく思惟するとしても、他の誰一人としてこれを知ることにはできなう。」(EHU, 2, 1, 17)

従って、魂がつねに思惟するという主張は、経験に反し不合理である、とロックは結論するのである。

「自分を欺こうとしない者は、自分の仮説を事実の上に築いて、可感的経験 (sensible experience) によって立証しなければならず、仮説を理由に、即ち自分がそうだと想定することを理由に、事実を推定してはならない。」(EHU, 2, 1, 10.)

ロックにとつて、哲学理論は、つねに可感的経験によって立証されなければならない。我々は経験 (感覚と反省)

を通してのみ観念を得、思惟を行うのであるから、経験を離れた思惟というものはない。そして、経験の教えるところでは、「魂はつねに思惟するとは限らなむ。」(The soul thinks not always.) (EHU; 2, 1, 9.) のである。

このようにして、ロックは、思惟は魂の本質ではなく作用(＝偶有性)であるに過ぎないと結論し、思惟(従って意識・自己意識)が「現実的」(actual)であるとは認めない立場を取るのである。⁽¹⁾

終わりに

以上、考察してきたように、デカルトは、その哲学から帰結する存在論的な要求(ドイツ語で言えば Notwendigkeit)に基づいて、我々の魂(精神)はつねに現実的に思惟する、と考えた。言い換えれば、cogito は一切の存在の基礎であるが故に、権利上「つねに現実的」でなければならぬ、と考えたのである。これに対して、ロックは、魂の思惟(thinking)は、経験的に事実上確認されるのでなければ、「現実的」とは言えないと考えたのである。

この両者の主張の相違は、デカルトの理性論的思惟とロックの経験論的思惟との相違を如実に反映したものと見ることが出来る。我々が両者の主張をどのように評価するかは、結局のところ、どのような立場から、より包括的であり整合的な哲学理論を構築するか、ということにかかっているであろう。確かに、この両者の主張は、実体としての「魂」(anima, soul)を基礎にして議論を続ける限り、互いに両立し得ないものである。しかし、例えば、後にカント行ったような、実体化されない「自」意識(Selbstbewusstsein)の構造と働きを考察するという手法に於いては、両者の主張は、批判的に統合されることが可能であると思われるのである。

注

(1) René Descartes, *Discours de la Méthode*, in: *Œuvres de Descartes*, publiées par Ch. Adam & P. Tannery, nouvelle présentation, Vol. VI, Paris, 1982, p. 38. なお、『方法序説』はフランス語の著作であるから、当然この箇所は *Je pense, donc je suis.* と表現されるべきであるが、哲学史の習慣に従って、ラテン語表記にした。

また、以下に於いて、デカルトの著作からの引用は、アダン・タヌリ版全集 (*Œuvres de Descartes*, publiées par Ch. Adam & P. Tannery, nouvelle présentation, II vols., Paris, 1974-1988.) により、『方法序説』は *DM.* の略号の後にアダン・タヌリ版第VI巻の頁数をアラビア数字で本文中に指示する。また、『省察』 (*Méditations de prima philosophia*) は、本文の例えは「第一省察」は *I. Med.*、付録の「第一反論」は *I. Obj.*、「第一答弁」は *I. Resp.* と表示し、その後にアダン・タヌリ版第VII巻の頁数を指示する。なお、翻訳は、『デカルト著作集』全四巻 (白水社、一九七三年) 及び『世界の名著・デカルト』 (中央公論社、一九六七年) 所収のものを主に参照した。

(2) cogitoの働きそのものが、自己意識の構造をもつことについては、拙稿「デカルトに於けるコギトと真理」(愛媛大学法文学部論集 文学科編 第二五号、一九九二年) 一三二—一三六頁参照。

(3) John Locke, *An Essay concerning Human Understanding*. 以下、本書からの引用は、P. H. Niddich 編集の *The Clarendon Edition*, Oxford, 1975. に基づき、*EHU.* の略号の後に、該当箇所の巻、章、節の番号を (*EHU.*, I, I, 1.) と行うように本文中に表示する。なお、翻訳は、大槻春彦訳の『人間知性論』岩波文庫版全四巻を主に参照した。

(4) 一見首尾一貫しているように思われるこのロックの主張にも、全く難点がないわけではない。

確かに、目覚めている時、我々はつねに思惟する。しかし、その思惟についての知覚は反省が、経験のレベルでつねに伴っ

ているだろうか。例えば、何かを一心不乱に考えている時、意識されるのは、思惟の対象（の観念）であって、思惟作用そのもの（の観念）ではない。ロック自身が、「人々は、外部感覚にたえず注意しながら成長するので、かなり大きな年齢になるまで、自分の内に起こるものを多少なりとも著しく反省することはまずないし、人によってはまず全くない。」(EHU: 2, 1, 8)と述べているように、内的経験としての「反省」(reflection)は、意識的経験としてつねに行われているわけではない。言い換えると、あらゆる経験につねに同時に自己経験が伴うという保証はないのである。所謂「無意識にやってしまった。」という言い方が、それを示している。これを考慮すれば、自己意識がつねに経験のレベルにあることを要求することは、むしろ我々の経験的事実に反すると考えるべきではないか、という見解も成り立つように思われるのである。